

### 指導者のリーダーシップの在り方が選手の社会的スキルに及ぼす影響：中学校野球部員を対象とした競技レベルとの関係性

中村, 豪 / NAKAZAWA, Tadashi / UENO, Yuki / NAKAMURA, Gou  
/ 中澤, 史 / 上野, 雄己

---

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of sports research center, Hosei University / 法政大学スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2017-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013845>

## 指導者のリーダーシップの在り方が選手の社会的スキルに及ぼす影響 — 中学校野球部員を対象とした競技レベルとの関係性 —

The influence of leadership on players' social skills  
— Relationship with competition level for middle school baseball club members —

中 村 豪 (スポーツ健康学部)

Gou Nakamura

上 野 雄 己 (日本学術振興会特別研究員 PD)

Yuki Ueno

中 澤 史 (法政大学国際文化学部・大学院スポーツ健康学研究科)

Tadashi Nakazawa

### 要 旨

本研究では、発達段階が未熟である中学生を対象に、指導者のリーダーシップのタイプが選手の社会的スキルにどのような影響があるのかを検討した。調査対象者は中学校の野球部員合計 69 名 (男子 68 名、女子 1 名、平均年齢 12.72 歳  $\pm$ 0.72 歳) であった。菊池 (1988) によって開発された、社会的スキルを測定する尺度である Kikuchi's Scale of Social Skills の問題解決、トラブル処理、コミュニケーションの 3 つの下位尺度および総得点を従属変数とし、指導者のリーダーシップのタイプ (専制型・民主型・放任型)、競技レベル (レギュラー・準レギュラー・非レギュラー) を独立変数とした二要因分散分析を行った。二要因分散分析の結果、すべての下位尺度において交互作用は有意ではなかったものの、3 つの下位尺度および総得点において Small 以上の効果量が確認された。その後の単純主効果の検定では、専制型の指導においてレギュラー群が非レギュラー群よりも有意に高い得点を示した。また、レギュラー群においては、専制型の指導が放任型の指導よりも有意に高い得点を示した。本研究の結果から、発達段階が未熟な選手では、指導者のリーダーシップの在り方によって選手の社会的スキルの得点に違いがあることが明らかとなった。

キーワード：社会的スキル、指導者、競技レベル

Key words : Social skills, Leader, Competition level

### I. はじめに

近年、子どもの社会性の低下が問題視されている。少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議 (2001) では、都市化や少子化の進展やテレビゲーム、パソコンなどの普及などにより、多様な人間関係の中で大勢で遊ぶ、友人と語り合う、他人と協力し合うといった社会性や対人関係能力を身につける機会が減っており、学校や地域社会といった本来社会性を育成する場で社会性が育まれにくくなっていると指摘している。また、文部科学省 (2009) の現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題では、現在の子どもたちは、昔の子どもたちに比べて一層、心の成長を支える基盤となる環境が悪化していると言わざるをえないと述べている。こうした現状は早急に打開しなければならない課題である。子どもの心を成長する場面は多く存在するが、中でも運動場面は子どもの心の成長に貢献することが知られている。その一方で、勝利至上主義や根性論による体罰問題が取り沙汰されていることに鑑みると、心を育てる指導のあり方が求められているという

現実も無視できない。

近年、社会性の必要性に目が向けられ、その有用性が検討されているものが「社会的スキル : social skill」である。相川 (2000) は社会的スキルを「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的対人行動と、そのような対人行動の実現を可能にする認知過程との両方を包含する概念」と定義している。中川・新井 (2008) は、中学生を対象に調査を行い運動経験は社会的スキル獲得に有効であると報告している。また、青木 (2005) は、菊池 (1998) の「Kikuchi's Scale of Social Skills (以下 KiSS-18 と略)」を用いて運動部員は文化部員と無所属の者よりも得点が有意に高かったことを報告している。このように運動が社会的スキルに影響を及ぼしていることが明らかにされているが、運動に社会的スキルの獲得を期待するには、サポートする組織や指導者の意識的な関わり方が重要と須田 (2011) は述べている。

昨今、このサポートする組織や指導者の関わり方が多様化してきている。生徒のポジティブな行動に焦点を当てた支援

である Positive Behavioral Intervention and Supports (以下、PBIS と略) や、生徒一人ひとりの違いに応じて指導を工夫する Differentiated Instruction (以下、DI と略)、人材開発の技法の1つで対話によって相手の自己実現や目標達成を図るコーチングなど、多くの指導法が実践されている。以上に共通していることは、支援的な立場を取っていることだが、実際の教育現場やスポーツ場面の指導の在り方は様々である。

Lewin, Lippitt & White (1939) は、リーダーシップのスタイルを専制型、民主型、放任型の3つに分類を行っている。Lewin et al (1939) は、民主型リーダーシップが、作業の質・作業意欲・有効な行動等の点で最も有効であると結論づけており、近年でも特にスポーツ界では民主型の指導が主流になりつつある。中澤・上野 (2016) は大学生を対象に調査を行った結果、選手の自主性を重視した指導スタイルの方が社会的スキルの獲得を促進する可能性が示唆されたと報告している。倉藤・田島・米谷 (2011) は「教えすぎ」、「結果にこだわりすぎ」や「ただやればいい」、「楽しければなんでもいい」というような偏った考え方ではなく、競技成績と部内の関係性を両立した指導が選手の自主性を向上させる可能性があることを報告している。教育現場では、文部科学省 (2012) により、自ら考え仲間と協働することによって、思考力や判断力、協調性などを養うという中央教育審議会の狙いからアクティブラーニングの推進がなされている。一方で、元中日ドラゴンズの監督である落合 (2001) は、選手が勝手に育つまで指導者はひたすら我慢すべきである、コーチという仕事は教えるものではなく見ているだけでいいと述べており、民主型に近い放任型の立場を取っている。このように指導の在り方は様々であるが、教育者としては、なにより心を育てる指導を心がけるべきであろう。

本研究では、Lewin et al (1939) に倣い3つの指導スタイルを次のように定義づけた。専制型は「顧問の指示により行動し、チームの方針や練習のメニューも顧問の指示に従い取り組んでいる」、民主型は「顧問の援助を受けてチームの方針や練習は選手中心で決定し部活動に取り組んでいる」、放任型は「顧問とのやり取りは少なく、チームの方針や練習は自分達で行っている」とした。以上のリーダーシップの種類の定義をまとめたものが表1である。

表1 指導者のリーダーシップのタイプの定義

類型	定義
専制型	顧問の指示により、行動し、チームの方針や練習のメニューも顧問の指示に従い取り組んでいる
民主型	顧問の援助を受けて、チームの方針や練習は選手中心で決定し、部活動に取り組んでいる
放任型	顧問とのやり取りは少なく、チームの方針や練習は自分達で行っている

そしてもう一つ、指導の在り方を考える上では発達段階についても考える必要がある。中央教育審議会答申 (1996) においては、児童生徒の発達段階に即し、チーム・ティーチング、グループ学習、個別学習など指導方法の一層の改善を図りつつ、その充実を図ることが提言された。また、三隅・中野 (1960) は小学生を対象に調査を行った結果、成員間の対人関係に違いが生じることや課題の難易度によって生産性が異なることを報告している。これらのことから同一課題であっても発達段階の違いにより当事者が感じる難易度は異なり、指導の在り方が対人関係にも影響をおよぼすことから、発達段階によって望ましいとされる指導が異なると推測される。

これまでの研究では運動や指導の在り方が選手に何らかの影響を及ぼすことは明らかにされてきたが、いずれも大学生等の発達段階が進んでおり、自我がある程度確立されている時期のものであった。そこで本研究では、対象を思春期である中学生とし、Lewin et al (1939) が提唱するリーダーシップの在り方が、発達段階が未熟な選手にどのような影響を及ぼすか検討する。

## II. 方法

### 1. 調査時期

2016年8月～9月

### 2. 調査場所

関東圏の中学校5校

### 3. 調査対象者

調査対象者は、中学校の野球部員とし、5校の中学校に依頼した。合計69名(男子68名、女子1名、平均年齢12.72歳±0.72歳)を対象に調査を行った。調査対象者の内訳は表2の通りである。

表2 調査対象者の内訳

	人数
男子	68名
女子	1名
合計	69名
平均年齢	12.72歳±0.72歳

### 4. 調査方法

フェイスシート及びKiSS-18を用いた集合調査法による質問紙調査を行った。フェイスシートでは氏名、年齢、競技レベル(レギュラー・準レギュラー・非レギュラー)、指導者のリーダーシップのタイプについて記入を求めた。指導者のタイプについては3タイプについて事前に説明し、自身が感じる顧問のリーダーシップのタイプを選択してもらった(表1)。KiSS-18への回答時間は10分程度、フェイスシートのへの回

答時間は5分程度であり、回答終了後直ちに回収した。調査対象者には、守秘義務の厳守及び得られたデータは、顧問には見せないことを説明し、研究へのデータ使用の了承を得た。

### 5. 測定尺度

KiSS-18は、菊池（1988）によって開発された、社会的スキルを測定する尺度である。問題解決、トラブル処理、コミュニケーションの3つの下位尺度および総得点で構成されており、18の質問項目に5件法（いつもそうでない：1点～いつもそうだ：5点）で回答することになっている。

### 6. 統計解釈

指導者のリーダーシップが選手の社会的スキルに及ぼす影響について検討するために、KiSS-18の問題解決、トラブル処理、コミュニケーションの3つの下位尺度および総得点を従属変数とし、指導者のリーダーシップのタイプ（専制型・民主型・放任型）、競技レベル（レギュラー・準レギュラー・非レギュラー）を独立変数とした二要因分散分析を行った。なお、本研究では、水本・竹内（2008）に倣い、有意水準とサンプルサイズに影響されない効果量を総合的に解釈することとした。また、交互作用について、有意もしくはSmall以上の効果量が認められた場合には、事後検定としてBonferroni法による多重比較および単純主効果の検定を行った。なお、統計学的有意水準は5%水準とし、効果量は $\eta^2$ を用い、 $\eta^2 = 0.01$ でSmall、 $\eta^2 = 0.06$ でMedium、 $\eta^2 = 0.14$ でLargeとした。

## III. 結果

二要因分散分析の結果、表3の通りすべての下位尺度において交互作用は有意ではなかった。そのため水本・竹内（2008）に倣い効果量（ $\eta^2$ ）を算出した結果、「問題解決」、「トラブル処理」、「コミュニケーション」、「総得点」のすべてにおいてSmall以上の値が確認された。そのため、Small以上の効果

量が認められた下位尺度において単純主効果の検定を行った。その結果、まず、「問題解決」では、専制型において準レギュラー群よりレギュラー群の方が有意に得点が高く、非レギュラー群よりレギュラー群の方が有意に得点が高かった（図1）。

次に、「トラブル処理」では、専制型において準レギュラー群よりレギュラー群の方が得点が高く、有意傾向が確認され、非レギュラー群よりレギュラー群の方が有意に得点が高かった（図2）。次に、「コミュニケーション」では、専制型において非レギュラー群よりレギュラー群の方が得点が高く、レギュラー群において放任型よりも専制型の方が得点が高く、それぞれ有意傾向が確認された（図3）。次に、「総得点」では、専制型において準レギュラー群よりレギュラー群の方が有意に得点が高く、非レギュラー群よりレギュラー群の方が有意に得点が高かった。また、レギュラー群において放任型よりも専制型の方が有意に得点が高かった（図4）。

## IV. 考察

本研究の結果から、指導者のリーダーシップのタイプと競技レベルの組み合わせに応じて、社会的スキルの得点に違いがあることが確認された。具体的には、まず「問題解決」、「トラブル処理」、「総得点」では、専制型において準レギュラー群、非レギュラー群よりもレギュラー群の方が有意に得点が高いことが示され、「コミュニケーション」では、専制型において非レギュラー群よりレギュラー群の方が得点が高いことが確認された。吉田・徳永（2002）は、レギュラー部員、競技レベルが高い者が「積極性や安定」などのライフスキルを獲得していることを明らかにしている。また、吉田（2002）は、部内での地位（競技レベル）の向上が、「積極性や安定」などのライフスキル獲得へ望ましい影響をおよぼすことを明らかにしている。また、境・池田・伊藤（2011）は、試合経験が豊富な選手の方が、社会的スキルの得点が高いことを報

表3 指導者のリーダーシップのタイプと競技レベルごとのKiSS-18の得点の変化

下位尺度	専制型(n=23)			民主型(n=25)			放任型(n=21)			主効果		交互作用				
	レギュラー (n=10)	準レギュラー (n=7)	非レギュラー (n=6)	レギュラー (n=13)	準レギュラー (n=8)	非レギュラー (n=4)	レギュラー (n=7)	準レギュラー (n=9)	非レギュラー (n=5)	F値	$\eta^2$	F値	$\eta^2$	F値	$\eta^2$	
問題解決	M	22.50	19.14	16.33	20.62	18.25	18.50	19.57	19.11	18.00	0.13	0.01	7.79**	0.22	1.63	0.08
	SD	(2.79)	(2.27)	(1.37)	(3.71)	(1.91)	(1.91)	(2.82)	(3.18)	(1.58)						
トラブル処理	M	17.30	13.57	12.83	16.15	13.38	14.00	15.71	14.67	14.20	0.06	0.00	5.03*	0.15	0.54	0.03
	SD	(2.31)	(3.74)	(3.60)	(3.02)	(3.07)	(5.03)	(3.86)	(2.45)	(4.09)						
コミュニケーション	M	26.60	23.00	21.33	23.23	22.75	21.75	21.71	23.44	23.20	0.39	0.02	0.87	0.03	1.37	0.08
	SD	(2.88)	(6.22)	(2.34)	(3.75)	(4.40)	(5.68)	(4.42)	(3.88)	(3.90)						
総得点	M	66.40	55.71	50.50	59.08	54.50	54.25	55.57	57.22	55.40	0.23	0.02	3.76*	0.12	1.88	0.1
	SD	(4.72)	(10.73)	(6.28)	(10.19)	(7.48)	(10.21)	(8.52)	(8.20)	(8.26)						

Note)

値は平均得点(標準偏差)、主効果及び交互作用は F値、効果量は $\eta^2$

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

$\eta^2$ : Small=0.01, Medium=0.06, Large=0.14

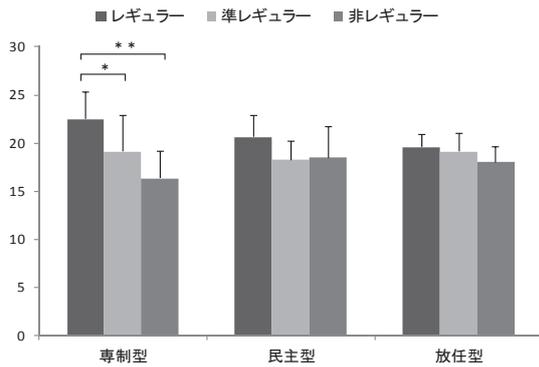


図1 問題解決に及ぼす指導者のリーダーシップと競技レベルの影響

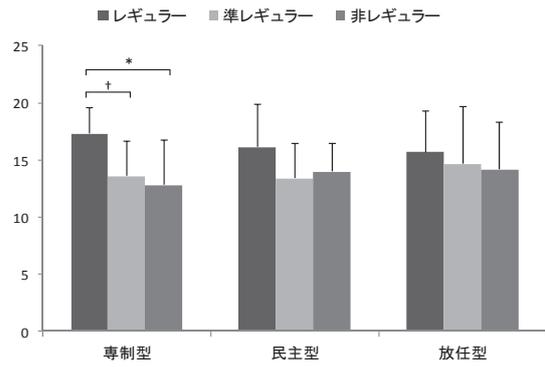


図2 トラブル処理に及ぼす指導者のリーダーシップと競技レベルの影響

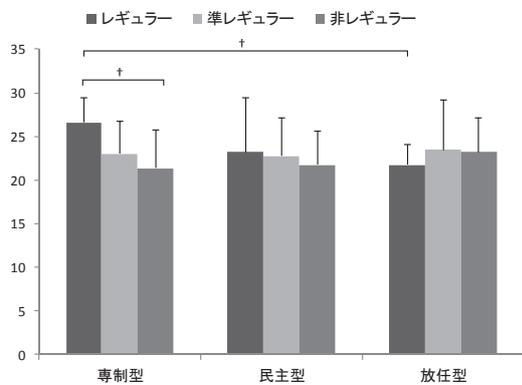


図3 コミュニケーションに及ぼす指導者のリーダーシップと競技レベルの影響

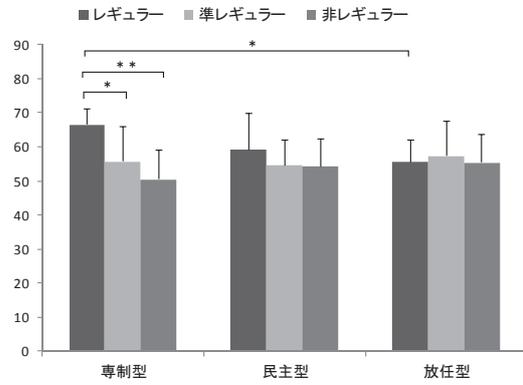


図4 総得点に及ぼす指導者のリーダーシップと競技レベルの影響

告している。本研究では、専制型の指導において、吉田・徳永 (2002)、吉田 (2002)、境ら (2011) と同様な結果を示した。しかし、専制型の指導では有意な差が確認された一方で、民主型、放任型の指導のタイプでは競技レベルによる差は認められなかった。これは、指導者の介入度が高い専制型の指導においては、緊張感の高い状況でも率先的に行動できる選手がレギュラーになっている傾向があると考えられる。一方で、民主型、放任型の指導のタイプでは、専制型の指導と比べ自由度が高いことから、選手間での発言や行動に差がみられず、同等レベルの社会的スキルを獲得していると考えられる。

「コミュニケーション」では、レギュラー群において、放任型の指導よりも専制型の指導の方が得点が高く、有意傾向が確認され、「総得点」では、レギュラー群において放任型よりも専制型の方が有意に得点が高かった。中澤・上野 (2016) は、選手の自主性を重視した指導スタイルの方が社会的スキルの獲得を促進する可能性が示唆された」と述べている。本研究では、中澤・上野 (2016) の研究とは異なる結果となった。これは、中澤・上野 (2016) の研究対象が大学生であったの

に対し、本研究では中学生であったからであると考えられる。大学生のように自我が確立されている発達段階とは異なり、心身ともに未発達な思春期では、細かく指示を与える指導の方が望ましい可能性を本研究では示唆している。また、指導者のリーダーシップのタイプの定義に違いがあったことも一つの要因であると考えられる。本研究では、指導者のリーダーシップのタイプの定義を選手自身の自由度の違いと指導者の介入度の違いから定義しているため中澤・上野 (2016) の研究とは異なった結果になったと考えられる。須田 (2011) によると、運動部活動所属者および非所属者ともに運動有能感を高める運動経験のあり方が社会的スキルの向上において有効になると思われると述べている。また、上野 (2006) や上野 (2007) の研究では、社会的スキル獲得に対する信念や価値意識が、島本・石井 (2008) は部活動に対する専心度が高いほど、運動経験によって獲得した社会的スキルの得点が高くなることを報告している。今回、レギュラー群において、放任型の指導よりも専制型の指導の方が得点が高くなったのは、自由度は極めて高いが指導者との関わりが薄い放任型の指導よりも、自由度は薄い介入度が高い専制型の指導の方

が、運動有能感を感じることができたことに加え、積極的な介入が選手の競技への専心度を高めたからであると考えられる。レギュラー群において、専制型と民主型で有意な差が認められなかったのは、選手主体のチーム運営ではあるが、放任型の指導よりも指導者の介入があったため、放任型ほど社会的スキルの得点に差が出なかったと考えられる。また準レギュラー群、非レギュラー群においては、全ての指導者のリーダーシップのタイプと比較しても有意差は認められなかった。これは、専制型の準レギュラー群、非レギュラー群が自由度の低い集団で率先的に行動できず社会的スキルの獲得が十分でなかったことに加え、民主型、放任型の指導では、自由度の高さから選手間に社会的スキルの獲得に差が出づらく、レギュラー群と近いレベルで社会的スキルを獲得していたからであると考えられる。

以上のことから、本研究では、指導者のリーダーシップのタイプと競技レベルの組み合わせから検討して、社会的スキルに及ぼす影響性について新たな視座を得ることができた。特に、指導者のリーダーシップのタイプによって、選手の社会的スキルにポジティブとネガティブな影響性の2側面が確認された。そのため、須田（2011）が指摘するように、スポーツ活動に社会的スキル獲得を期待するには、サポートする組織や指導者の意識的な関わり方が重要である。今後は、発達段階が未熟な選手を対象とした指導については、積極的な介入をすることで選手の競技への専心度を高め、ポジティブな発言を増やし運動有能感を高める必要がある。また、指導者の関わり方によって、選手間の言動に差が出ることがないように、選手主体のチーム運営をサポートする指導者の姿勢が必要と考えられる。

最後に、本研究の限界と課題について3つ挙げられる。まず、1つ目として、サンプル数の少なさから、指導者のリーダーシップのタイプと競技レベルの交互作用において有意な差を得ることができなかった。2つ目として、対象が中学生のみであり、各発達段階での必要な指導を本研究で検討することはできなかった。3つ目として、部活動も野球部と絞っており、競技の特性についても触れることができなかった。今後は対象を拡大し、スポーツ界に共通することや発達段階の違いについて深く探りたいと考えている。

## 謝辞

本研究に際して、貴重な部活動の練習時間を割いてアンケート調査にご協力していただいた各中学校の先生方、生徒の皆さんに感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 相川 充 (2000) 人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－, サイエンス社.
- 青木邦夫 (2005) 高校運動部員の社会的スキルとそれに関する要因. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 5: 25-34.
- 上野耕平 (2006) 運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係. 体育学研究, 51: 49-60.
- 上野耕平 (2007) 運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得. 体育学研究, 52: 49-60.
- 落合博満 (2001) コーチング言葉と信念の魔術, ダイアモンド社.
- 倉藤利早・田島 誠・米谷正造 (2011) 指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響. 川崎医療福祉学誌, 20 (2): 457-470
- 境 英俊・池田秀美・伊藤豊彦 (2011) 大学生剣道部員におけるライフスキルの獲得とバーンアウトとの関係について. 八女郡広川町立中広川小学校島根大学教育学部紀要 (教育科学), 45: 37-45
- 島本好平・石井源信 (2008) 運動部活動におけるスポーツ経験がライフスキルに与える影響 活動へのコミットメントの差異からの検討. 日本教育心理学会総会発表論文集, 50: 722.
- 須田和也 (2011) 大学生の社会的スキルとスポーツ経験および運動有能感に関する研究. 共栄大学研究論集, 9: 37-53.
- 中川靖彦・新井 肇 (2008) 「生きる力」を育てる中学校運動部活動の教育的機能に関する研究. 日本教育心理学会総会発表論文集, 50: 546.
- 中澤 史・上野雄己 (2016) 指導スタイルとパーソナリティ, 社会的スキルの関連—ジュニアラグビー選手を対象とする予備調査結果—. 日本スポーツ心理学会第43回大会研究発表抄録集, 114 - 115.
- 三隅不二不・中野繁喜 (1960) 学級雰囲気に関するグループ・ダイナミックスの研究 (第Ⅲ報告) 所謂、専制的、民主的、自由放任の指導タイプの効果に関する. *Cross-Cultural Study*, 1: 10-22
- 水本 篤・竹内 理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために. 英語教育研究, 31: 57-66.
- 文部科学省 HP (2009) 現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題 .[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm)
- 文部科学省 HP (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)
- 文部科学省 HP (1996) 「個に応じた指導」の一層の充実 中央教育審議会答申 .[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345164.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345164.htm)
- 文部科学省 (2009) 少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議報告 (概要) 心と行動のネットワーク -心のサインを見逃すな、「情報連携」から「行動連携」へ- [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afldfile/2016/05/12/1370854\\_010.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afldfile/2016/05/12/1370854_010.pdf)

18. 吉田安宏 (2002) 運動・スポーツ経験がライフスキルに及ぼす影響. 平成 13 年度九州大学大学院人間環境学研究所修士論文.
19. 吉田安宏・徳永幹雄 (2002) 運動・スポーツ経験とライフスキル. 徳永幹雄 (編) 健康と競技のスポーツ心理. 不昧堂出版, pp.156-166.
20. Lewin, K., Lippitt, R. & White, R.K. (1939). Patterns of aggressive behavior in experimentally created social climates. *Journal of Social Psychology*, 10, 271-301.